

一斉授業で個別学習をめざす授業形式

—セルフスタディ授業の紹介—

平野 信喜

(聖カタリナ大学)

1. 一斉授業の特徴

一斉授業では教師は、同様な教材を用い、学生に到達度を明らかにして、進む授業の仕方を言う。この授業では、教えられる内容は同一であり、学生は教師が教えたことを理解することが、到達度に達すると見なされる。一斉授業で成績が優秀なのは、教師が出題する試験問題に合致する答案を書いた学生である。反対に成績が悪いのは、教師の考えに合致しない学生であった。殆どの大学の授業は、この一斉授業形式でなされてきたし、今後もなされるだろう。その理由として、次のように考えることができる。

第一に、一斉授業は採算性があることである。ひとり一人の進度を考え、その進度に沿っていくならば、学生に合わせた教師が必要となり、採算性を考えると、不可能に近い。その点、ひとりの先生が大勢の学生を教えることによって、たとえ進度が異なって、その進度についていけない学生の問題であっても、この学生を無視して進むことができる。

第二は、効率性があることである。教師が大勢の学生に一度に教えることは、ひとりひとりに個別に教えるよりもはるかに効率がある。教師が教えても、教えられる学生はそれをどのように理解するかは学生に任されている。理解できない学生はその学生の自身の問題であり、個々の学生に理解を求めることは不可能に近い。

第三には、計画性が持てることである。教師は自分の授業目標にしたがって授業計画を立てる。一斉授業では、学生の進度に合わせることでなく、教師がたてた授業計画にそうすることで、授業が進行し、その結果、授業目標に到達することができる。個々の学生の目標を授業計画でたてることは一斉授業では不可能に近い。

教育は個々の学生の能力を引き出すことを目的にしている。上述した一斉授業では能力が均等で、進度を合わせても、ついていける学生が前提となる。ついていけないのは学生に学習能力が見られないのであって、これらの学生は途中でやめてもらわなければならない。今までは、このような学生は以前にはやめてもらっても仕方がなかった。

しかし、数年後、大学全入となり、大学への進学率が50%を超える時代になってきた。定員割れの大学が増え、能力の少ない学生も入学する時代になってきたのである。すると勉強する意欲がある学生を伸ばすには、分からない点を個別に教え、自分の能力に応じた学び方を保障するなら、学生の能力を引き出すことができるだろう。大学が研究と同時に教育にも重点を置く必要ができてきたのである。それには一斉授業でなく、個別授業をしなければならない。上述のように大学ではそれは不可能である。すると、一斉授業で、個別授業に代わる形態を取らなければならない。それが、一斉授業での個別学習である。

2. 一斉授業での個別学習の特徴

個別学習はひとり一人に応じた目標を持ち、進度を自分で決め、自分のペースで学習する仕方を言う。したがって、わからないところは、教師に自分で聞き、自分で解決する必

要がある。一斉授業では、ひとり一人に応じた目標を持ち、進度を自分で決め、自分のペースで学習することは建前では不可能である。一斉授業で個別学習を保障するには教師中心のペースを学生中心にする必要がある。それにはどのようにすべきであろうか。

第一に、授業を受ける学生が自分の出欠を取ることである。今まで一斉授業では教師は出席を取ってきた。それは、出席が勉強意欲を見る指標であり、出欠を取ることが教師に権威を与えることになっていた。しかし、個別学習では、出席するかしないかは、学生が決める。したがって、学生が自分の出欠を取ることは、個別学習の前提である。ただし、試験を受ける資格は一定の日数に出席することが必要である。それを換算して、学生が授業すれば、何もオール出席をすることは必要ない。自分でもし、毎授業ごとのテーマや内容が予告編のように知らされていれば、学生は、選択して、授業に取り組むことができる。

第二は、試験問題の作成は学生であり、採点も学生がすることである。一斉授業中心での教師は授業目標を立てて、その到達度を測るのが試験であった。教師の理解させたいことを学生が理解した結果は、試験に現れる。理解していない学生は勉強していないことになる。したがって、試験の結果は、どれだけ学生が教師の考えを理解しているかにかかっている。しかし、個別学習では、教師が目標を提示するものの、その目標を決めるのは学生である。学生は自分の目標に合致させるように成果を見出すには、自分が学んだことを試験の形で表わすことである。そして、その表わし方で自分の勉強の成果が見出される。

第三は、学習の仕方では学生と教師が一致することである。個別学習では到達度や知識の獲得は個々の学生に任されている。それは能力や意欲によって決まる。ここまで勉強しなさいと言っても学生に強制できない。すると学生は不安になる。それは、今まで、一斉授業で学生に枠をはめ、勉強を強制したことが多いからである。個別学習では、自分で勉強するので、勉強の仕方は自由となる。ましてや、一斉授業での個別学習なので、教師と接触する時間は個別授業の比でない。すると、自分で試験問題の設問、問題作成に至る過程という学習の仕方を教えていなければならない。それは今まで試験問題の設問、問題作成は教師の独占だったからである。加えて、この試験問題の設問は問題意識、問題提起であり、それらの導き方も教えていかななければならない。また、問題作成は論文作成と同様な過程をたどるため、論文作成過程をも教えなければならない。

第四は、成績は学生の自主申告であるということである。教師は一斉授業では、試験はもとより、日ごとの授業態度を平常点として学生を評価する。すると、絶えず、教師の視線を気にして勉強せざるをえない。個別学習では、自分がさぼると自分につけが回ってくる。反対に真面目に取り組めば、成果が上がる可能性が広がる。この日ごとの授業態度を平常点となると、自分の授業態度を自分の点で評価することによって、自分の授業態度を見直すことができる。また、試験問題では、勉強の進度を計るのに自分がどのくらい勉強してきたかで決まる。この基準を教師と学生が合意し、その点数を学生が自主申告することによって、勉強の成果を自分で得られるのである。

3. まとめ

一斉授業では教師が授業の主体であり、学生は授業の客体である。他方個別学習では学生が勉強の主体であり、教師は学生を支える客体である。一斉授業での個別学習では、授業を展開することによって、教師は授業の主体であり、学生は勉強の主体となる。互いに授業の主体となることによって、学生はもとより教師も能力が引き出されると考えられる。